

2012年12月25日

<研究課題> 「無縁社会」における高齢単身者の死に関する研究：大阪市西成区釜ヶ崎を事例として

代表研究者 NPO 法人こえとことばとこころの部屋 代表理事 山田 假奈代
共同研究者 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任教授 西川 勝
大阪市立大学都市研究プラザ 博士研究員 白波瀬 達也
紙芝居劇むすび マネージャー 石橋 友美

【まとめ】

大阪市西成区釜ヶ崎を研究対象として、「無縁社会」における高齢単身者の死に関する学際的な研究を実施した。調査の結果、日雇労働者の街から高齢者福祉の街へと変容している釜ヶ崎は、我が国の将来像を先取りした地域として、厳しい状況のなかに「無縁社会」に対する抵抗の試みがあった。福祉制度のみでは解決できない高齢者の孤立に関して、顔見知りの関係から葬儀の協力へといたる諸実践において、社会の新しい共生関係の萌芽が認められる。

1. 研究の目的

本研究は、高齢単身者が多く居住する大阪市西成区釜ヶ崎（あいりん地区）をフィールドとし、高齢単身者の死の迎え方、葬儀のあり方、ならびに宗教団体や市民組織による高齢単身者の死や葬儀にかかる取り組みに関する実地調査をとおして、「無縁社会」における死の迎え方や新しい葬儀のあり方を考えるための基礎研究をおこなうことを目的としている。

研究の方法としては、人類学的・社会学的なフィールドワークとあわせて、臨床哲学的な視点、実践に携わる者のアクションリサーチも組入れる学際的な方法をもつものである。

「無縁社会」化が日本全体で進行する現在、人の死という問題に焦点をあてつつ、「縁」＝「人と人の繋がり」のあり方を探究する本研究は、変容の過度期にある現代日本社会における新たな価値観を創出することが期待でき、その社会的意義はきわめて高いと考え、調査を実施した。

2. 研究方法と経過

2-1 釜ヶ崎における高齢生活の概況調査

調査対象：釜ヶ崎の高齢者

調査者：白波瀬達也

調査方法：文献調査、参与観察、インタビュー

調査期間：2011年11月～2012年10月

2-2 釜ヶ崎における高齢単身者の実地調査

(1)釜ヶ崎のサークル活動にみる高齢生活と死

調査対象：紙芝居劇むすびのメンバー

調査者：石橋友美

方法：参与観察、インタビュー

調査期間：2011年11月～2012年11月

※紙芝居劇むすび

2005年に発足した釜ヶ崎に暮らす高齢者たちを中心とする紙芝居グループ。西成区太子2丁目にある事務所を拠点都市、地域内外での公演を年間約30回実施している。

(2)釜ヶ崎の集合住宅にみる高齢生活と死

調査対象：「支援ハウス路木」の住人

調査者：上田假奈代

調査方法：参与観察、インタビュー

調査期間：2011年11月～2012年11月

※支援ハウス路木

2006年に建設された西成区萩之茶屋2丁目にある10階建て45室の鉄筋コンクリート集合住宅。管理運営者はNPO法人ライフサポート路木。2011年からはNPO法人こえとことばとこころの部屋が支援ハウス路木の管理運営に協力している。

(3)釜ヶ崎に暮らす高齢者の意味世界

調査対象：「哲学の会」の参加者

調査者：西川勝

調査方法：ワークショップ型調査

調査期間：2012年4月～2012年11月

※哲学の会：フランスで始まり、日本では臨床哲学関係者が広めている「哲学カフェ」の手法

を用いた対話ワークショップ。参加者の自由で対等な対話を重視する。西成市民館において月に1回、開催した。参加者数は10名前後、継続する参加者も増え、調査終了後も実施している。

3. 研究の成果

3-1 釜ヶ崎における高齢生活の概況

釜ヶ崎は大阪市西成区の北東に位置する約0.6km²の地域である。釜ヶ崎という下層空間の形成は戦前までさかのぼるが、日雇労働の求人が集まる「寄せ場」が本格的に成立するのは高度経済成長期に入ってからである。1970年に開催された大阪万国博覧会に向けての建設需要に応じて全国から釜ヶ崎に流入する単身男性日雇労働者が急増し、バブル経済期には20,000人以上を数えた。高度経済成長期からバブル経済期にかけて釜ヶ崎は活況を呈していたが、1990年代前半から景気低迷、工法の機械化、日雇労働者の高齢化などにより、求人が激減。多くの日雇労働者がこれまで生活の拠点としていた簡易宿泊所(ドヤ)に住まうことが困難になり、野宿生活を余儀なくされるようになった。このような状況を背景に、釜ヶ崎では官民を問わず多様なセクターによる支援活動が活発化した。2000年頃からは民間の支援団体の粘り強い社会運動のなかで、これまで限定的にしか対応されてこなかった、日雇労働者たちへの生活保護の適用が進んだ。2012年には釜ヶ崎の住民の3分の1に相当する約10,000人が生活保護受給者となっている。

このようにして、近年の釜ヶ崎は「非定住的空間」から「定住的空間」へと変容してきている。彼らの住まいの主要な受け皿になったのが、「福祉アパート」と呼ばれる元簡易宿泊所である。簡易宿泊所から業態を変更したアパートの多くは、敷金・保証人なしで入居できるため、病院や施設を退所・退院しても帰る場所を持たない低所得者、精神障害者、知的障害者、刑余者など、社会的に排除された人々の受け皿にもなっている。

3-2 高齢単身者の死をめぐる問題

釜ヶ崎で暮らす人々の大半はこれまで移動性の高い生活をしており、なおかつ単身者であるため、地域に十分な生活基盤がない。就労しているときは、「労働者」であることが本人の社会的役割であったが、生活保護受給以降、「労働者」に代わる社会的役割の構築に苦心する者は少ない。

したがって、安定した住居は確保したものの、

自宅に閉じこもりがちになるなど、他者とのコミュニケーションの機会をほとんどもたない者が相当数存在する。調査報告書「大阪市西成区の生活保護受給の現状」(大阪就労福祉居住問題調査研究会, 2006)は、野宿経験をもつ釜ヶ崎の生活保護受給者の23%が近隣関係、友人関係、相談相手のいずれももたないことを明らかにしている。また、同報告書は大半の生活保護受給者がグループ活動・社会活動に参加していないことを示している。彼らは生活保護の適用等で、ようやく社会福祉制度に「包摂」されるようになったが、社会関係からは依然「排除」されたままといえよう。

そこで大きな問題になるのが単身生活に起因する孤立である。1975年の時点で釜ヶ崎の女性人口は全体の約30%を占めていたが、その後の居住空間の変容などによって2010年の時点では15%にまで減少している。この間、家族世帯はどんどん釜ヶ崎から転出していき、単身世帯化が進んだ。そして、コミュニティ活動は停滞し、地域住民によるインフォーマルなセーフティネット機能は著しく弱体化したと考えられる。

女性と子どもがほとんどいない今日の釜ヶ崎は、人々を結びつけ、相互扶助機能を高める契機がほとんどない。釜ヶ崎に暮らす生活保護受給者には、西成区(西成区保健福祉センター)のケースワーカーが担当者としてつくが、そのサポート機能は限定的である。なぜなら、西成区は生活保護受給者数が他の自治体に比べて著しく多く、1人のケースワーカーが300人を超える生活保護受給者を担当しているからである。今日の釜ヶ崎は自らのケアをおこなう自助機能のみならず、住民が相互にケアをおこなう共助機能、さらには行政等の公的機関によっておこなわれる公助機能まで脆弱だといえよう。そのため利用可能な社会制度の存在に気付くことなく暮らす地域住民は少なくない。

次に高齢化についてみてみよう。先述した通り、高度経済成長期からバブル経済期にかけて、釜ヶ崎の居住空間は三畳一間の簡易宿泊所に代表される単身男性用に作り替えられてきたため、家族世帯が地域内から姿を消し始めた。これによって人口の再生産構造が崩壊し、年少人口が急減した。加えて、旧来の日雇労働者の高齢化が進んだことにより、釜ヶ崎は著しい高齢社会となっている。

松藤栄治(2008)は、釜ヶ崎の住所不定者を対象とする大阪市立更生相談所が2003年度から2007年度にかけて敷金支給した生活保護受給者を対象にした調査をおこない、そのうちの9.5%が保護開始5年以内に死亡していること、そして、その約半数が自宅での死亡・遺体発見であること

を明らかにしている。これらの死は多くの場合、誰に看取られることもなく亡くなる「孤独死」であると考えられる。

高齢者が多数を占める釜ヶ崎では、「死」が日常化しているにもかかわらず、地域内で葬儀がおこなわれことがほとんどない。そのため、地域住民の死が不可視化されやすい。よって、地域住民が正面から死に向き合う機会は乏しく、定住化が進んだ今日でも葬送の選択肢は非常に限られたものとなっている。孤立した状態での高齢生活は、残された自身の生を肯定的に捉えること困難にし、安心して老いることができない状態を生み出していると言っても過言ではない。

このような状況が顕在化するなかで、釜ヶ崎では社会的孤立を防ぐ各種の取り組みがなされている。本研究では上記の問題意識をもちながら「縁」＝「人と人の繋がり」の構築を図る「紙芝居劇むすび」と「支援ハウス路木」の実践現場を描出し、今日の釜ヶ崎における高齢単身者の「生と死」のありようの一端を明らかにした。

事例1: 紙芝居劇むすびメンバー Fさん

2009年5月、釜ヶ崎の簡易宿泊所にて孤独死(享年74歳)。かつて東大阪で研磨工として働いたFさんは、持病のぜんそくなどで入退院をしているうちに困窮し、野宿を経験。その後、生活保護を受給し、釜ヶ崎のアパートに暮らしていた。幻聴の症状があったFさんは隣人とのトラブルが絶えず、自宅に帰れなくなり、警察の検死の結果、身元不明の変死として扱われ、近隣の葬祭業者に送られた。「むすび」にはFさんの生活支援を請け負っていた介護事務所を通じて死亡および遺体安置所の連絡を受けた。死後5日ぐらい経過してようやく遺体と対面できた。Fさんとの日常的なつながりをもっていたむすびメンバーたちは「自分たちで葬儀をしたい」という気持ちがあったが、親族に身元確認がとれるのを待たなくてはならず、葬儀までに日数を要した。「早く葬儀をしてやりたい」とのむすびメンバーの声があがり、葬儀とは別に「Fさんを偲ぶ会」を開催。それから10日ぐらい経って葬儀会社から葬儀の実施に関する連絡を受けた。葬儀がおこなわれたときには、死後1ヶ月近く経過しており、遺体に変形があった。むすびメンバーたちは変わり果てた姿に胸を痛める一方で、無事に葬儀がおこなわれたことに安堵した。Fさんの葬儀は葬儀会館の小さな部屋で行なわれたが、参列者が入りきらないほど集まった。Fさんには妹がいたが、遺骨の引き取りを拒否。そのため、むすびが知

人の僧侶に依頼し、寺の墓地に納骨した。Fさんの命日には毎年、むすびメンバーたちによって法事が催されている。

事例2: 支援ハウス路木入居者 Hさん

2011年11月に自室にて孤独死(享年77歳)。弁当の配達員によって死亡が発見された。Hさんはアルコール依存症を患っていることから毎日酒浸りの生活で、食事をほとんどとらずに生活をしてきた。一方、支援ハウス路木が週3回、交流スペースで実施するモーニング喫茶には欠かさず参加していた。

九州出身のHさんは職を転々とするなかで離婚。妻子と別れ1980年代に釜ヶ崎で暮らすようになった。晩年は生活保護を受給して暮らしていた。Hさんが死去した際、Hさんの姉は遺体の引き取りを拒否。そのため支援ハウス路木が葬儀場を手配し、知人の僧侶に依頼し、葬儀を執行した。

Hさんの親族のなかでは唯一、本人の娘が夫に内緒で葬儀に参列した。Hさんの棺桶には別れた妻が編んだセーターが納められた。支援ハウス路木の交流スペースを通じて親しくなった人たちも「礼服もないが・・・」と恐縮しながら葬儀に参列した。式が終わった後も、交流スペースには、Hさんの遺品の一部を小さな机の上に並べ祭壇のようなものが作られた。後から亡くなったことを知った友人が、たまに訪れて手を合わせる光景もみられる。

事例3: 支援ハウス路木入居者 Kさん

2012年10月、自室にて孤独死(享年64歳)。「異臭」に気付いた支援ハウス路木のスタッフがマスターキーで扉をあけたところ、真っ黒に変色したKさんが仰向けになっていた。遺体からウジ虫が這い出るほどの陰惨な状況であった。日常的にスタッフたちが入居者たちの生活状況を把握していたため、このようなかたちで孤独死が起きてしまうことは想定外であった。スタッフたちは、「もっとKさんの変化に敏感に気付いていたら、悲惨な死に方をさせずにすんだかもしれないのに」と強い自責の念を抱いた。Kさんの遺体は遺族がすぐに引き取り、葬儀も営まれたが、遺品は残されたままだったので、支援ハウス路木のスタッフが処分した。

この一件を契機に、支援ハウス路木では、介護サービスがはいっていない住人に対し、看護師による安否確認事業を開始した。しかし、なかには「余計なことだ」と訪問を拒否する者もあり、孤独死を防ぐことの困難に直面している。

以上3つの事例を紹介した。釜ヶ崎の厳しい状況のなかで、孤独死を免れなかった事例に対して、周囲の人たちが、その死を忘れえぬ事柄へと変化させるために努力している様子がわかる。

高齢単身者の孤独死は、在宅において完全に防ぐことは困難である。問題なのは、誰にも看取られることなく死を迎えるという事実だけではない。その死が見送られることもなく忘れ去られてしまうことにある。

人は人の間に生まれ育ち人と関係を持ちながら生きることによって人間となる。死は誰かが逃れられない現実であるが、一人で死んで屍体になっても、残った生者からの哀悼を受けることで遺体となり、死者となる。死者は人間社会のメンバーである。忘れられた死は、人間社会からの追放とさえ言える。

完結した人生を生ききった者として、死者として、人びとの記憶になかに他の死者たちと共に語りかけられる存在になることが、真の意味で「無縁社会」を解消する方策になるであろう。

3-3 釜ヶ崎で暮らし考える実践

西成市民館において月1回、開催された「哲学の会」のテーマは、以下の通りである。

テーマの選定は、参加者からの発案による。第1回「しあわせ」、第2回「遊び心」、第3回「色」、第4回「自分とは」、第5回「安らぎ」、第6回「親しみ」、第7回「死」、第8回「自由」、第9回「愛」、第10回「愛」。

参加者は、釜ヶ崎に在住する生活保護受給の高齢者をはじめ、近隣の定時制高校生までをふくむ。平均して10名前後の多様な背景の参加者があった。

毎回2時間の対話が、進行役の補助によって行われる。対話のルールは、人の発言は最後まで聞く、自分の意見を自分のことばで話す。発言する、しないは自由で、途中の入退場も自由である。目立ったルール違反はなかった。参加した感想として次のような発言があった。多くの賛同を得た内容である。「日頃から、哲学には関心があった。物質的な支援や、宗教的な救い、一時的な娯楽に関しては、釜ヶ崎において複数の活動がある。しかし、自分で考えて話をして、それをお互いに聴き合うという経験は少

なかった。真面目な話を知らない人と、これだけ長時間にわたってできることが、自分にとってはとても大切な経験になっている」。

一回だけの参加者もいたが、西成市民館に案内してある張り紙のテーマに惹かれた人が多い。第7回「死」の場合、はじめての参加者が酒臭い息をして会場に入ってきたが、自分がガン患者であること、死に対する恐怖はないことなどをしばらく話してから、他の参加者の意見を静かに聞き入ることがあった。途中で退席した彼とは、西成市民館の出口で再会した。その手には焼酎が握られていたが、「また、やってくれよ」と進行役に話しかけてきた。

「哲学の会」は、テーマに則して対話をすすめていくが、正しく立派な結論を求めているわけではない。同じテーマについて参加者がそれぞれ自分の考えを深め、人の意見に耳を傾ける時間の過ごし方を大切にしている。自己紹介もなしに始まる「哲学の会」だが、対話の空間は人と共にあることの実感に繋がっている。

4. 今後の課題

今回の研究成果は、近い将来に予測される日本社会の「無縁化」に対処する方策の萌芽的な取り組みを示唆している。高齢単身者が急増し、社会からの孤立が深まれば、その不幸は社会全体の活力低下につながる。本研究で示された小さな取り組みを、どのようにして制度・政策的なものにくみ上げるか。公助と自助と共助の有機的連携を強化する具体的方策を明確にすることが今後の課題となる。

5. 研究成果の公表方法

本研究成果は、2013年度に大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの報告書としてまとめあげ、刊行する予定である。また、上記報告書を基盤にし、他地域、他国における単身高齢生活における死をめぐる問題についても考察を深めていき、公開シンポジウムの開催を試みる予定である。

以上